

## 国語辞典の意味記述に見られる問題点について

### — 語の意味と句の意味 —

山本 清隆

<キーワード：国語辞典・意味記述・語結合・慣用語>

#### 1. はじめに

私たちが言葉について何か確認したいことが生じると、多くの場合国語辞典を頼る。一般に、国語辞典に書かれていることは専門家が精緻の限りを尽くして記したものであり、疑いようがない事実であると思われるからである。しかし、実際には国語辞典が様々な問題点を抱えているのもまた事実である。この問題については、これまで山本（1980）（1981）（1993）（2001）で論じてきた。

山本（1980）では「かがむ・しゃがむ・うずくまる」、山本（1981）では「うつ・なぐる・ぶつ・たたく・はたく」といった類義語の意味分析を試みつつ、国語辞典における各語の意味記述が必ずしも的確ではない点を指摘し、その代替案を提示した。山本（1993）では、複合動詞の自他に関する記述が国語辞典によってまちまちである点を指摘し、その原因と考えられる文型の問題について論じた。山本（2001）では、方言語形とその記述に関するいくつかの疑問—例えば、その方言語形がどの地域で用いられているという記述が正確かどうか—について、方言辞典の記述と比較しながら考察した。

国語辞典の問題点については、このように記述項目に関して論ずべき点が種種あるが、本稿では意味記述の問題点を取り上げることにする。上述のように、山本（1980）（1981）でも既に意味記述の問題点を取り上げた。本稿で改めて意味記述の問題を取り上げることにした理由は以下による。

国語辞典の意味記述は、1980年代以前と比較すると現在は格段に進歩していることは疑いようがない。近年刊行されている国語辞典を見れば、それは明らかである。次に挙げるのは、1960年代に刊行された国語辞典における「食う」の意味記述と、同じ

国語辞典の最新版における同語の意味記述である。それぞれを比較してみると、その質の違いは明白である。

1966年版：①(イ)たべる。(以下略)

2002年版：①食物をからだに取り入れる。(ア)食物を口に入れ、かんでのみこむ。食べる。[参考]「食う」は「食べる」よりそんざいな言い方で、おもに男性が使う。(以下略)

前者が類義語に置き換えただけで本来の意味での意味記述を怠っているのに対して、後者では意味記述だけではなく、位相に関する記述まで行なっている。

このように意味記述が変化した背景としては、意味論に関する研究が1970年代後半から飛躍的に進んだ点が指摘できよう。これは、1976年に刊行された柴田武編『ことばの意味』が大きな影響を与えたものと推測される。それ以降、類義語分析を中心とした意味論研究が多く見られるようになった。山本(1980)(1981)も、その流れである。

国語辞典の意味記述は、意味論研究の進展とともに大きく変化してきた。しかし、それにも関わらずまだ疑問を抱く記述は散見される。この問題については、今後とも調査研究を継続していく予定である。

本稿では、調査研究を進めている「基本語彙における意味記述」のうち、色彩名称に関する意味記述の問題—具体的には「語の意味と句の意味のあり方」—を取り上げてその中間報告をする。

## 2. 国語辞典における「黒い」の意味記述

意味記述は、当該の見出し語に対してなされていなければならないことは改めて指摘するまでもない。しかし、見出し語そのものではなく、見出し語を含んだ句について意味記述しているのではないかと考えられる例が見られる<sup>(1)</sup>。例えば、次に挙げる「黒い」に関する意味記述がそれである。

### 三省堂現代新国語辞典初版

黒い<形>①黒の色をしている。②黒っぽい。こげ茶色をしている。「顔の色が—」③悪い考えをもっている。「腹の—人」④不正(・不吉)の感じがする。「—うわさ・死の—影」

上記の意味記述ブランチにおいて、③の「悪い考えを持っている」がはたして「黒い」の意味として適切であるといえるのか。仮に「黒い」にこのような意味があるのであれば、「彼は<悪い考えを持っている>人だ」の意を表わす「彼は<黒い>人だ」という言い方が可能なはずである。しかし、そのような表現は普通はせず、あくまでも「彼は<腹の黒い>人だ」と言わなければならない。すなわち、「悪い考えを持っている」は「黒い」の意味ではなく、「腹が黒い」の意味だとすべきなのではないか。では、他の国語辞典がどうなっているかといえば、同様の記述がなされているものが圧倒的に多い<sup>(2)</sup>（当該のブランチのみを示す）。

三省堂国語辞典第2版第3版第4版第5版

④悪い考えをもっているようすだ。「腹の一人」

例解新国語辞典第6版

④かくされた悪事やわるだくみがあるようだ。[句例] 黒いうわさ。腹が黒い。

現代国語例解辞典第3版

③悪心があつて公明でない。また、悪事や犯罪を疑わせるものがある。「腹が黒い」「黒い噂」「黒い霧」

新選国語辞典第8版

⑤心が良くないようす。「腹が一」

新解国語辞典第2版

②心がよくないようすである。「腹の一男」

学研現代新国語辞典改訂第3版

⑤悪・不正・不吉などの感じがする。「腹が一・い」「一・い死の影」

学研国語辞典

③（心が）正しくない。「はらが一」

角川必携国語辞典

③悪事や不正がありそうな感じである。「一うわさが流れている」「腹が一」

角川最新国語辞典

③正しくない考えや悪い目的をもっている。「腹が一・い」

角川新国語辞典

②不公正である。よくない。「腹が一・い」

角川国語辞典

②不公正である。よくない。「腹が一・い」

集英社国語辞典第1版

- ④隠された悪事・不正・犯罪を感じさせるものがある。「腹が一」「うわさ」  
「一霧」

講談社国語辞典第2版

- ④悪心がある。「はらの一人」

詳解国語辞典

- ④不正・不吉・不気味さなどを感じるさま。「うわさ」「政界の一・い霧」  
「腹が一・い」

精選国語辞典新訂版

- ④正しくない心を持っている。「腹が黒い」

福武国語辞典

- ③悪い考えを持っている。不正な感じがする。「腹の一人」

要解国語辞典

- ⑤心が正しくない。腹黒い。

清水新国語辞典

- ②きたない。正しくない。▽腹の一男

例解国語辞典

- ④心が陰険である。「腹の一男」

記述の有りようは概略二つに分けられる。一つは、『新選国語辞典』『精選国語辞典』などのように「心」に限定して「正しくない・よくない」の意味とし、用例として「腹が(の)黒い」のみを挙げているものである。もう一つは、『例解新国語辞典』『詳解国語辞典』などのように「腹が黒い」以外にも「黒い噂」「黒い霧」などの用例を挙げ、「不正・不吉・悪事」などの意味としているものである。

両者の違いが何によるものかといえ、語結合のあり方に関して解釈が異なる、ということである。後者のように「腹が黒い」を「黒い噂」や「黒い霧」と同じブランチに入れているということは、単に意味が同じということだけではなく、語結合のあり方に関して自由結合だと解釈していることになる。自由結合とは、語と語の結合が一定の決まりの中で比較的自由であり、取り替えが利くものをいう。例えば、「一を食べる」の「一」には「ごはん/パン/りんご/…」のように食物に関わる名詞ならばいくらかでも共起可能であり、名詞と動詞とが自由結合の関係にあることになる。

これに対して、「腹が黒い」が慣用句であるとする（それが一般的な解釈であると思われる）のは、拘束結合だと解釈していることになる。拘束結合とは語と語の結合が全く固定的であり、取り替えたり離したりが容易ではないものをいう。例えば、「道草を食う」であれば、「べんべん草を食う」「道草を食べた」のように名詞と動詞のいずれも取り替えることができず、また、「道草を学校の帰りに食った」と間に修飾語を入れると不自然な表現となる。さらに、意味の上でも「道草」の意味と「食う」の意味から「道草を食う」全体の意味「寄り道をする」は構成されないことから、「道草を食う」全体で一語相当と見なさなければならない。このような固定的な結合関係が拘束結合である。

問題は、「腹が黒い」や「黒い噂」「黒い霧」は自由結合なのか、それとも拘束結合なのか、ということになる。まず、「腹が黒い」について考えてみると、ここでの「腹」は「腹を読む」や「腹が太い」などの「腹」とおなじように「心・気持ち・度胸」などの意を表わしているといえる。では、「腹」をそれらの類義語に置き換えて「心が黒い」「気持ちが黒い」などと言えるかといえ、それは不可能である。これに対して、「黒い噂」「黒い霧」の方は、その意味するところを転用すれば「黒い資金」「黒い事件」などのようにある程度生産的に表現することが可能である。

また、「彼は周りの誰よりも腹が黒い」という表現は「彼は腹が周りの誰よりも黒い」と間に修飾語を入れるとかなり不自然な表現となる。一方、「政界の黒い霧」は「黒い政界の霧」でもさほど不自然とはならない。

以上のことから、「腹が黒い」は拘束結合であり、慣用句として扱うべきだということになる。したがって、「黒い」の意味記述として「悪い考えをもっている」を挙げる<sup>(3)</sup>のは不適切であり、この意味記述は「腹が黒い」という句の意味としなければならないというのが本稿の結論である。

### 3. おわりに

意味を記述する場合、一般的には難しい語の方が困難であると思われがちであるが、実は平易な語の方がはるかに苦勞する。動詞であれば、平易な語はランチ数も多く、具体的な意味や抽象的な意味、比喩的な意味など意味的な広がりを見せ、どのように分け、どのようにまとめていくかが難しい。例えば、「取る」は新明解国語辞典では8ランチ、三省堂国語辞典第5版では30ランチとなっている。これに対して、「<sup>4</sup>竊る」などのように非日常的な動詞は大方ランチは一つである。

名詞についても、「水」や「空気」をどのように意味記述するかは容易いことではない。同じことは色彩名称についてもいえる。色彩名称は、その色を見せた方が理解は速い。国語辞典の中には、巻頭に色見本を載せているものもあるほどである。しかし、それは意味記述ではない。したがって、必然的に何かを例として色を想起させるしかない。このような色彩名称に関わる意味記述については、次の機会に譲ることとする。

### 【註】

- (1) 慣用句は、子見出しとして示されるのが通常である
- (2) 『岩波国語辞典』は、これらとは異なった記述方法をとっている。

・『腹が-』正しくない心をもっている。

すなわち、固定した語結合を先に示し、その意味を記述するという方法である。この方法ならば問題はない。

- (3) 「(腹が)黒い」の意味記述をこのような形で示したのは、管見に入る限りでは『辞海』(昭和29年初版発行、三省堂)が最も古いものである。

黒し(形)①墨のような色である。②濃紫・かっ色・にび色などの、黒に近いものという。

「クロキ御装ひ」③日に焼けている。「クロイ顔」④公明でなく、悪心がある。「腹いと-」

### 【参考文献】

- 遠藤織枝他編(1994)『使い方のわかる 類語例解辞典』小学館
- 柴田武編(1976)『ことばの意味』平凡社
- 森田良行(1977)『基礎日本語』角川書店
- 山本清隆(1980)「かがむ・しゃがむ・うずくまる<類義語の意味論的研究>」『日本語研究』第4号、東京都立大学日本語研究会
- (1981)「うつ・なぐる・ぶつ・たたく・はたく(はる・ひつぱたくなど)<類義語の意味論的研究>」『日本語研究』第5号、東京都立大学日本語研究会
- (1981)「国語辞典における自他記述の問題点」『東海大学文明研究所紀要』第13号、東海大学文明研究所
- (2001)「国語辞典における方言語彙」『信州大学教育学部紀要』第104号、信州大学教育学部

【使用国語辞典一覧】

- ・三省堂国語辞典第2版(1974.3.1 第1刷)三省堂
- ・三省堂国語辞典第3版(1982.2.1 第1刷)三省堂
- ・三省堂国語辞典第4版(1992.2.10 第1刷)三省堂
- ・三省堂国語辞典第5版(2001.3.1 第1刷)三省堂
- ・三省堂現代新国語辞典初版(1998.11.10 第1刷)三省堂
- ・例解新国語辞典第6版(2002.3.1 第二刷)三省堂
- ・現代国語例解辞典第3版(2001.1.1 第1刷)小学館
- ・新選国語辞典第8版(2002.1.1 第1刷)小学館
- ・新解国語辞典第2版(1999.1.1 第1刷;2000.2.10 第3刷)小学館
- ・学研現代新国語辞典改訂第3版(2002.4.1 初刷)学研
- ・学研国語辞典第2版(1984.1.20 第1刷)学研
- ・角川必携国語辞典(1995.10.27 初版)角川書店
- ・角川最新国語辞典(1987.2.10 初版;1992.2.10 25版)角川書店
- ・角川新国語辞典(1981.1.20 初版)角川書店
- ・角川国語辞典(1969.12.1 初版;1984.1.20 323版)角川書店
- ・岩波国語辞典第6版(2000.11.17 第1刷)岩波書店
- ・集英社国語辞典第1版(199.2.25 第1刷)集英社
- ・講談社国語辞典第2版(1991.11.5 第1刷)講談社
- ・詳解国語辞典(1985.11.15 初版;1992 重版)旺文社
- ・精選国語辞典新訂版(2000.1.20 3版)明治書院
- ・福武国語辞典(1989.9.1 初版)福武書店
- ・要解国語辞典(1985.3.25 初版;1988.12.20 4版)清水書院
- ・清水新国語辞典(1990.10.20 初版;1991.11.20 再版)清水書院
- ・例解国語辞典(1956.2.10 第1版;1959.4.1 第13版)中教出版
- ・辞海縮刷版(1954.8.25 初版;1966.2.10 25版)三省堂